



## 明治の佐伯三青年（十六）

—— 龍溪・鳴鶴・鶴谷 ——

### 御手洗 一 而

（賛助会員・川越市小堤）

#### 西南戦争起る

明治九年といふこの年は、明治政府にとっては、財政確立のため、前年から計画していた秩禄処分と地租改正を施行に移した年でもある。この思い切った政策は、茨城や三重県下に大規模な農民一揆を誘発し、秋になって、「金禄公債証書発行条例」が公布されて士族の家禄処分が始まると、旧藩士達の生活に急激な変化をもたらした。そして、この士族達の生活窮乏が、士族層の反乱の転起ともなるが、敬神党の決起については、一種の狂信的な思想集団であることも見逃せない。

敬神党は、維新の国難を元寇にもじって、「伊勢の神風」の神慮から「神風連」と呼んだように、林桜園の思想からうけつがれ

た「うけひ」による神道思想は、第二次大戦前、軍部のとつた一種の国粹主義に似ている。排他的であり狂信的であり、不思議な神秘性をもっていた。彼等は廢刀令を無視し、「神勅を奉じて奸吏を誅す」とする直接行動が、そのまゝ、彼等の思想であつたが、太田黒・加屋らの領袖による奇襲は、安岡県令・種田鎮台司令官を葬つたにすぎず、隊員はことごとく自刃または捕えられて壊滅した。

この敬神党の鎮庄に見る如く、政府の力はそれほど弱くなかつた。土族反乱の各種情報に対しても、各地に密偵を放つてその秘密情報を収集し、情報機関としての電信も、この頃ではかなり整備されていた。

明治二年に東京―横浜間、ついで大阪―神戸間が開通した電信は、明治六年二月には長崎線が開通して、東京九州間の連絡が完成し、すでに暗号通信を用いて、九州の状況は迅速に中央に伝えられていた。

例えば、のちに起る萩の乱では、その直前に、時の関山口県令は、前原一誠が三千挺の鉄砲を用意した情報を暗号電報で大久保内務卿宛て送っているから、この頃の政府は、電信によって各地の情報を的確につかんでい

た。

むしろ政府の心配は、反乱土族軍の横の連絡であつた。強大な勢力をもつ西郷軍を軸として、各地の不平土族達が一斉に蜂起する状態が政府にとつては頭痛の種であつた。だが、横の連絡機関をもたない不平土族達は、血気にはやるあまり勝手に事を起し、政府に各個撃破の形をとらせて、反乱鎮庄を容易にさせたのは皮肉であつた。

敬神党が奇襲作戦に出た翌々日、十月廿六日には秋月党が決起した。秋月は筑前藩の支藩で五万石であつた。

磯淳・宮崎車之助を領袖とする秋月党は、当初同志の呼応を策して敬神党と密約があつたようだが、敬神党の暴発によって急進派の若者達に押しきられている。

そして廿八日には、山口県萩で前参議前原一誠が決起する。

これらは、熊本敬神党の反乱の決起を機として、連鎖反応の如く起りながら、各党孤立して自殺行為にひとし自己清算であつた。

「西南紀伝」や「秋月党遺聞」は、反乱土族の昔ながらの和銃による反乱軍の兵力と、新銃による洋式化され

た組織ある政府軍との戦力の大差を指摘している。反乱軍が政府の力を過少評価したわけでもあるまい。彼等にしてみれば、勝敗の結果よりも、死ぬことに意義を見出すかの如き決起であった。

「馬鹿馬鹿しい」

藤田はこの萩の乱の報をうけて、なじるように言い放ったが、矢野は、

「九州における維新の始まりだ」

と、腕組みをしたまま、起るべくして起った反乱の知らせに大きく溜息をついた。

矢野は机に向かっていたが、藤田は大きな火鉢を独り占めして、灰をかき廻していた。

報知社の上局も、十一月になると透き間風が通り、二つばかりの火鉢の炭火では、保温とまではいかなかった。

「こんな時は酒にかぎる」

飛び入りの客が、土瓶酒を土産にして、お茶代りに配って廻る。評論新聞の元記者達である。

評論新聞は、関新吾・小松原英太郎・横瀬文彦等、名だたる論客が次々に投獄され、ついに発行禁止になって

いた。ちなみに、小松原などは、十一年に出獄してみると、同郷の同志達は殆んどが西郷と運命を共にしていたという悲劇につながるが、評論新聞社は以前報知社に印刷を依頼していた関係もあって、この頃では、毎日のように、論客が顔を出しては、勝手な熱を吹きあげていた。

「こうなりゃ、頼みになるのは西郷だけだ」

誰かがぼつりと言ったが、西郷によせる期待は大きかった。

「犬死はつもらぬ。敬神党、秋月党に続いて萩の乱、各個撃破は政府の思うつぼではないか」

藤田の発言には理屈があったが、次の言葉でかき消された。

「どうにもならんのじゃ」

過激派を任じる評論新聞の論客達にとっては、なにがなんでも決起あるのみであった。

「なに。薩摩は肥後や長州のようなわけにはいかんぞ」仲間の一人が突然大声でどなった。薩摩出身者らしい。

皆は顔を見合わせた。確かに西郷が起れば政府も動揺するという意識は誰もがもっていた。

この時期、専制政府に対する不満、一握りの有司によ

って国を動かされてたまるかという意識は国中に充満していたが、その改革の方法については各人様々であった。

藤田は、報知の社説を通じて、暴力を否定してきた。

あくまで言論の戦いによるべきだと主張した。士族と人民の結合を考える報知の方向は、藤田や矢野の考え方もあり、自殺行為にひとしい士族の決起は、むしろ犬死のように腹立たしかった。

藤田は、その夜早速、自殺行為の無暴よりも、「士族の思い上り」について筆をとった。そして、不平士族の拳兵は、「頭から人民の力を度外視し、自分達だけで第二維新の任にあるとするのは、結局は「人民を蔑如するのは甚しき」思い上りであると論説した。

続いて九月二十日の社説には、「日本帝国には士族ありて人民なし」との意識を痛烈に批判したが、矢野はあくまでも自分のペースで、十二月二日に「総代人ノ選挙法」を論じた。

相次ぐ蜂起は、すべて東京を離れた西国の出来事であったが、政府膝元がまるで平穩であったわけではない。

十月二十九日から三十日にかけて、旧会津藩士であった永岡久茂等が、秋月や萩の前原等に呼応するように思案橋事件を起している。そして、各事件の顛末について、各社の雑報記者は転手古舞いの忙しさであった。

秋月党の残党今村増資や増田静男が捕われて斬罪になり、萩の前原以下八人の刑が執行されるのも、奇しくも同じ十二月三日であった。

師走になると、戸外が急に人通りが多くなるが、その翌々日、報知社の上局では、藤田と矢野が朝から顔をつき合わせていた。

「矢野さん。萩の乱も思い切った処刑でしたな」

藤田の問いに矢野は大きく頷いた。

「うん。これは沼間さんの話だが、前原前参議の処分は、大久保内務卿は同郷の木戸さんに任せたい。木戸さんも無念ではあるうが、あゝいう裁定を下した。その代り、木戸さんは鹿児島では未だに家禄処分が実行に移されていないと、大久保さんに不満をぶつけたらしい」

「西郷―大山県令の線ですか」

「その通り。同県人の大久保が特別扱いするというのじゃ」

「その噂はよく耳にしますか」

「沼間さんも言っていたが、西郷王国・鹿児島王国は認められんが、大久保も打つ手がないんじゃと笑っておった」

「そうですか。政府部内にも亀裂が生じたか」

「いやいや、いつの世でもあることだが、内務省当局も困っているのが実情ではあるまいか。何かを画策して刺戟するのも困るが、何だかんだ言っても西郷を一番よく知っているのは大久保だと沼間さんは結論づけた」

「確かにその通りだとすれば、内務郷の出方を待つしかない」

「茂吉。しばらく眼が離せんぞ」

こうして、二人のひそひそ話は終ったが、この時期、大久保は確かに西郷の真意を測りかねていたが、「西郷に限って謀反などあり得ない」と自信をもっていた。

たゞし、西郷の門下生である私学校党の緊迫した空気は、大久保等の読みとは裏腹に、反乱士族の処刑を聞く

に及んで、一触即発の危険をはらんでいた。

こうして明治十年を迎えることになる。

年が明けて一月中旬になると、川路大警視は、私学校党の切り崩しをはかるため、東京警視局在勤の反私学校派である少警部中原尚雄、安楽兼道以下巡査ら二十一名や士族の有志を鹿児島県下に潜入させた。市内に集まる諸郷士族を私学校派から離脱させる作戦であったが、彼等は間もなく私学校党員に一網打尽に捕えられる。その上、私学校党殲滅のため西郷暗殺を計画したという口述書を強いられ、その背後には大久保がいるということで私学校党を刺戟することになった。

同じ頃、火薬庫襲撃事件が起った。

政府は鹿児島の不穏を察して、予め陸軍省保管の火薬や銃砲を大阪に移すことにし、夜中に密かに汽船による搬出を試みたが、いち早くこれを見つけた若者達は激怒し、一月二十九日・三十日の両日にわたって、草牟田にあった火薬庫を襲って弾薬を強奪し、二月一日には群れをなして造船所を襲った。この事件は、いち早く京都・東京の政府に「暴発」として伝えられたが、西南戦争勃

発のきっかけとなった。

この時期、一月三十日は、故孝明帝の十年祭にあたるため、天皇は京都御所にあり、政府の要人も、大久保を東京に残して、殆どの要人は京都に下っていた。

大久保は、二月三日の午後、海軍省に入った電報によつて、この変事を知らされた。

血気にはやる若い党員の暴発は、桐野や篠原等に命ぜられたものでもなく、全くの暴挙で、西郷とても知るよしもなかった。

西郷は丁度この頃、大隅半島の高山で狩猟中であつたが、この知らせを聞いて、

「わがこと終る」と、嘆息したと伝えられている。

西郷は直ちに下山して、五日・六日と私学校本部で今後の方針を討議するが、若い党員が勝手に突つ走つたとはいえ、まんまと政府の挑発に乗つた形となり、両者の正面衝突が避けられない今、西郷も彼等を見捨てるわけにはいかなかった。

## 折りにふれて 岩田トヨ子

(会員・佐伯市長良)

山々も谷も昔にかわらぬに流るる水の無きを悲しむ

溪谷を流れ落ちいし滝つばに今は水なく昔をなつかしむ

つばくろは何を思いてまいもどる巢にいるひなに心残るか

パスの窓緋の帯の如き彼岸花しばしのあいだ我を忘るる

洞門に今に残りしのみのおと禅海のつちの音聞ゆるがごとく

みぎひだり奇岩奇峯は紅のただひと色に染まりおりけり

肥料やれど寒さ厳しく秋なすの堅くなりしをとりにてくやめり

年ふりし梅に一枝咲きおれり神の恵のいのち尊し